

刊行にあたって

平成二七（二〇一五）年四月、兵庫県立歴史博物館内に「ひょうご歴史研究室」が開設されて五年が経過する。その前年に博物館長として就任していたが、翌年に研究室が新設されるとは予想だにしていなかった。「井戸知事の肝煎り」との説明を受けた記憶があるが、五年の歳月を顧みて、兵庫県とくに播磨の歴史研究の面白さに驚いている。なかでも、「たたら製鉄」である。

というのも、当初設けられた三つの研究班のうち、『播磨国風土記』・「赤松氏と山城」については著名で、その筋の専門家でなくとも内容が類推できる。しかし「たたら」である。播磨で「たたら」である。

個人的なことだが、わずかな手がかりが前任校である関西大学文学部に在籍中であつた。退職の二年か三年前のゼミ生が、兵庫県宍粟市出身ということで、卒業論文のテーマを「播磨のたたら」に選んでいたのである。卒業論文は閲読後、試問を受けて合格するのが通例であるが、一読すると、宍粟市千種町内に天児屋鉄山跡（兵庫県指定史跡）が「たたら里学習館」とともにあることが紹介されていた。播磨の「たたら製鉄」に、初めて出会った瞬間であつた。

しかも、件の学生は試問の折、実際に「たたら里学習館」に行つて説明を聞いてきたとパンフレットを見せた。実地調査を重視するわたしは、その態度を見て、卒業論文の合格を決めたと言つてもいいが、驚いたのは、つぎの問答である。「君卒業したらどうするの？」というわたしの問いに答えて、「地元に戻って役場に就職します」とハッキリと答えるではないか。播磨のたたらを卒業論にした学生が、卒業後、地元に戻って働くという――「たたら」には、そんな力があるのか！と、感嘆した記憶が残る。

果たしてその後、彼は宍粟市役所に就職したが、ひょうご歴史研究室の活動を通じて偶然、出会うこととなつた。平成三〇年度の活動指針「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめる」を立てるために宍粟市役所を訪れた。西岡章寿教育長と面談していた時、前述の思い出話を聞かれた教育長が、勤務中の彼を即座に呼び出され、五、六年ぶりの再会が実現したのである。

県内各地の歴史文化遺産の調査・研究を通じて、県民の「ふるさと意識」の醸成に寄与することは、ひょうご歴史研究室の使命であるが、「たたら製鉄」遺産は、彼のような実例をすでに生み出していたのである。その伝統は、二〇年以上にわたつて続けられている宍粟市立千種中学校のたたら体験学習にも見ることができ（藤

田淳「千種鉄によるたたら製鉄復元の取り組み」『ひょうご歴史研究室紀要』四、二〇一九年三月。「たたら製鉄」はまさに、生きた文化遺産なのである。

その一方、「播磨のたたら製鉄」の印象は薄いと云わざるを得ない。それは、たたら製鉄研究の先進地出雲（島根県）と比べると顕著である。島根県立古代出雲歴史博物館では、平成二三年度に企画展「たたら製鉄と近代の幕開け」、令和元年度に企画展「たたら 鉄の国出雲の実像」が開催され、古代から近代にいたる鉄生産の歴史が一望されたのである。さらに製鉄炉遺構や遺物、製鉄集団と金屋子信仰、「鉄山必用記事」や「先大津阿山村山鉄洗取図」、軍需と民需の利用など、たたら製鉄のもつ多彩な側面が浮かび上がってくるのも素晴らしい。田部・櫻井・絲原などの巨大鉄師の存在と合わせ、出雲たたら姿は圧倒的である。

それと比べるなら、「播磨のたたら」は迫力不足である。播磨にも、田辺健一・宇野正碓・上山勝・鳥羽弘毅氏らたたら製鉄研究に献身した先達がいたことが明らかとなっており、「中国地方との比較検証にたえられただけの実績を挙げるには、先人の業績を継承しながら課題を明らかにし、考古学的な発掘調査と文献史学による史・資料調査に加えて地形学的方法なども取り入れるなど総合的な取り組みが必要」なのである（大槻守「播磨のたたら製鉄研究を拓いた人たち」『ひょうご歴史研究室紀要』三号、二〇一八年三月）。

その取り組みの成果としてこの度、『近世播磨のたたら製鉄史料集』が発刊される運びとなった。「文献史学による史・資料調査」の成果である。収録された史料三点のうち二点が、兵庫県立歴史博物館蔵であるのは、まさに「灯台下暗し」の感が否めないが、ひょうご歴史研究室が設置された故の成果である。

興味深いことに三点の史料は、江戸時代の前期から後期にかけて連続しており、播磨のたたら製鉄の様相と推移を明らかにする可能性を秘めている。松江藩のような大藩の権力を背景に、巨大な鉄師が存在する出雲と異なり、天領と中小の藩が割拠する播磨では、鉄師の存在がきわめて微弱である。それが、播磨のたたら製鉄関係史料の少なさを規定しているが、それにも関わらず、千草屋・鳩屋といった鉄師と管理役所である山方役所の史料が残ったことは幸いであった。

本史料集の公刊が、播磨のたたら製鉄研究の促進剤となることを心から願うものである。

令和二年（二〇二〇）三月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長 藪田 貫